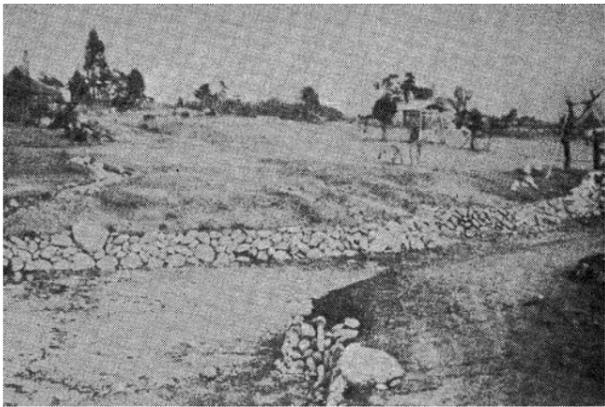
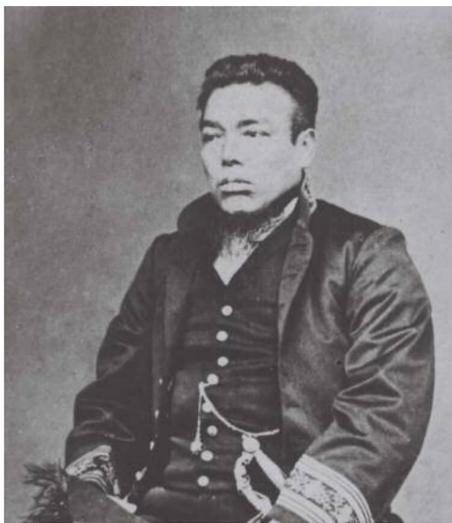


年	主なできごと
一八六八 (明治一)	プロシア(ドイツ)人R・ガルトネルが渡島国亀田郡七重村、現北海道七飯町を開墾し、六本のさくらんぼをはじめ、多種の果樹等を試植した。
一八七二 (明治五)	北海道開拓使庁において、アメリカ人ホラシ・ケプロンの助言により各種果物苗木とともにさくらんぼが導入される。清国に派遣された産業視察員がさくらんぼの苗木を持ち帰り、内務省勧業寮に試植される。
一八七五 (明治八)	内務省勧業寮全国に苗木を配布。山形県にもさくらんぼの苗木三本が配布され、県庁の構内に試植する。また置賜県にも二本配布された。
一八七六 (明治九)	初代県令三島通庸が、北海道開拓長官黒田清隆の手を通じて、さくらんぼ、りんご、ぶどうの苗木三〇〇本を取り寄せ山形香澄町の試験地に植え付ける。
一八七八 (明治一一)	県が「千歳園」内(現在の県立山形東高等学校敷地)に産業試験場を設置し、勧業寮より導入した果樹の試験栽培を開始する。さくらんぼは九八本植え付けられた。
一八八五 (明治一八)	県は地方産業の発展を目的とし、半官半民の「山形興業会社」を設立し、三田育種場より二四種の苗木を購入し、栽培希望者に提供する。
一八八八 (明治二一)	山形興業会社種苗部の吉井賢太郎が、自園のさくらんぼを人力輸送により仙台に出荷する。
一八九〇 (明治二三)	山形県産のさくらんぼが、仙台から東北本線で東京へ出荷される。



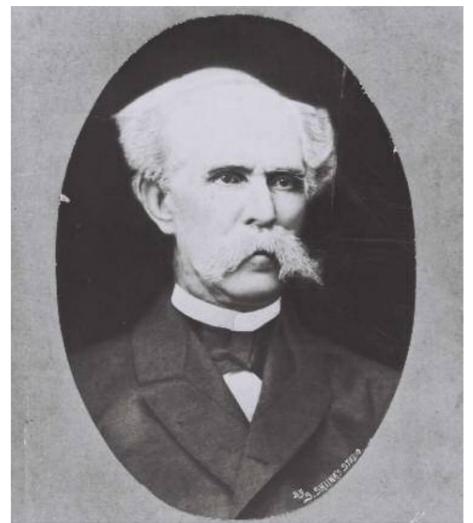
千歳園

県令三島通庸が明治11年に千歳園(山形市内)に試験場を開設し、勧業寮から払い下げられたさくらんぼ、りんご、ぶどうなどの試作がおこなわれた。



三島 通庸(みしま みちつね)

山形県初代県令。土木、教育、農業、県都造営等功績は数多く、山形県の土台を築いた。明治9年北海道開拓長官黒田清隆を通じ、さくらんぼの苗木を導入した。明治11年には、「千歳園」内に産業試験場を開設し、試験栽培を開始した。



ホラシ・ケプロン

明治4年アメリカ合衆国農務局長を辞し、北海道開拓頭取兼顧問として日本に赴任した。さくらんぼ、りんご、ぶどう等の西洋の果樹をアメリカより導入し、わが国の果樹栽培の歴史に一大改革をもたらした。

一八九五  
(明治二八)

寒河江市の井上勘兵衛が、さくらんぼの缶詰作りを自宅で始める。

一九〇一  
(明治三四)

奥羽線が山形まで開通したため、県外出荷が増え、栽培面積も急激に増加する。

一九〇七  
(明治四一)

県農事試験場では、農商務省指定のさくらんぼ品種試験園として圃場を設け、仏国種一四、米国種二六、在来種その他一一計五一品種の品種比較試験を開始する。

一九一〇  
(明治四三)

県農事試験場において、日本園芸会主催の桜桃名称一定協議会が開かれ、国外から導入した主要品種に和名をつけ、協定名称として発表する。

一九一二  
(大正一)

東根市の佐藤栄助、現在の主要品種「佐藤錦」の育成を始める。

一九二八  
(昭和三)

東根市の果樹苗木生産者岡田東作が「佐藤錦」の苗木を売り出す。

一九三〇  
(昭和五)

県が県外移出に有望なさくらんぼ、ぶどう、なし、かきの植栽を奨励する。

一九三七  
(昭和一二)

寒河江市に日東食品を誘致して缶詰加工がはじまる。

一九五〇  
(昭和二五)

戦時中に食糧増産のために伐採されたさくらんぼが、再び盛んに植えられるようになる。



岡田 東作(おかだ とうさく)

中島天香園(東根市)を大正2年に創業し、さくらんぼやりんごの苗木を販売した。佐藤栄助の品種改良を支え、昭和3年に優良なさくらんぼを「佐藤錦」と命名し、苗木を広めた。



佐藤 栄助(さとう えいすけ)

家は東根市で代々醤油醸造業を営みながら果樹園の経営をはじめ、大正元年から品種改良に取組み、後の「佐藤錦」を作り出した。「佐藤錦」の生みの親。



桜桃品種名称一定会の開催

県農事試験場では、明治41年に農商務省の指定による「桜桃試験」が始まり、同43年に日本園芸会主催の「桜桃品種名称一定会」が開催され、「ナポレオン」、「黄玉」、「日の出」等の統一名称が決定された。

一九五二 (昭和二七)	天皇陛下に初めてさくらんぼを献上する。
一九六六 (昭和四一)	寒河江市に県立園芸試験場が落成する。
一九六九 (昭和四四)	チクロショックで果実缶詰全体の需要が激減する。
一九七〇 (昭和四五)	米の生産調整が始まり、さくらんぼの栽培面積が急激に増え始める。
一九七一 (昭和四六)	雨よけテントが開発される。
一九七五 (昭和五〇)	缶詰用「ナポレオン」の価格が暴落し、生食用の「佐藤錦」への更新が進む。
一九七八 (昭和五三)	アメリカ産さくらんぼがはじめて輸入される。
一九八二 (昭和五七)	さくらんぼが「県の木」に制定される。
一九八三 (昭和五八)	生育期間の天候に恵まれ、過去最高の生産量(二〇、四〇〇トン)となる。



現在の雨よけハウス

現在の雨よけ施設は、生産性の優れたパイプハウスのタイプになっており、県全体で結果樹面積の75%に当たる約2,200haのさくらんぼ園に導入され、品質の良い果実生産に不可欠なものとなっている。



開閉式の雨よけテント(昭和40年代)

昭和44年のチクロショックにより缶詰需要が激減し、生食主体のさくらんぼ栽培への転換がすすめられ、実割れをふせぎ完熟したものを出荷するため、開閉式の雨よけテントが開発された。



缶詰加工場

さくらんぼの缶詰加工業は、昭和12年に横浜から日東食品を寒河江市に誘致したことに始まる。戦後、加工さくらんぼ需要が増え、多くの加工会社が誕生した。

一九八六 (昭和六一)	寒河江市で「さくらんぼ種吹きとばし大会」が始まる。
一九八八 (昭和六三)	「佐藤錦」の栽培面積が「ナポレオン」を抜き、栽培面積第一位となる。
一九九〇 (平成二)	加温ハウス栽培が本格的に始まる。
一九九一 (平成三)	園芸試験場で育成された「紅秀峰」、「紅さやか」が品種登録される。
一九九二 (平成四)	アメリカ産さくらんぼの輸入が全面解禁される。
二〇〇二 (平成一四)	東根市で「さくらんぼマラソン大会」が始まる。
二〇〇三 (平成一五)	さくらんぼ観光果樹園への年間入園者数が五〇万人を突破する。
二〇〇五 (平成一七)	県産さくらんぼが台湾に試験輸出される。 オーストラリア産さくらんぼの輸入が解禁される。
二〇一二 (平成二四)	県のさくらんぼ出荷規格からS玉果が除外される。 「日本一さくらんぼ祭り」が開催される。



さくらんぼ祭り

県内の各さくらんぼ産地では、観光果樹園があり、年間60万人が「さくらんぼ祭り」に訪れることから、本県の重要な観光資源の一つになっている。



新品種「紅秀峰」の誕生

平成3年に県園芸試験場で育成された「紅秀峰」が品種登録された。大玉で、甘味の多い品種で、現在では「佐藤錦」に次ぐ、栽培面積を誇る。



さくらんぼ種吹きとばし大会

昭和61年から寒河江市で始まったイベントで、平成24年は6月17日に開催され、約1,000名が参加した。これまでの最高記録は、23m。